

論文要旨

申請者氏名：金子直也

申請学位：博士

主論文題目：モロッコにおける国民統合の土壌

－独立に至る社会の変容とベルベル人

主論文要旨

序論

モロッコ近現代史の先行研究の多くは、アラブ・イスラームの文脈で考察され、それらでは国民統合の土壌として、シャリーフ（預言者ムハンマドの血統）やバイア（臣民はスルタンに忠誠を誓い、スルタンは社会の安定を保証する関係）等の王権の宗教的正統性に言及している。保護国化以前のモロッコは、スルタンの支配が及ばないシバの地（不服従地域）が存在し、その主たる住民はモロッコ人口の過半を占めていたベルベル人であったが、彼らを中心に据えて考察したものはほとんど見当たらない。

そこで、本稿ではベルベル人に着眼し、20世紀初頭から独立に至る期間を射程として、王権の宗教的正統性等がその後の国民統合の歴史的土壌となっていたと言えるのかを検証するとともに、モロッコ社会の変容の実情を明らかにする。

モロッコの国民統合の土壌は、社会の変容の中でベルベル人の帰属意識が、部族・地域からモロッコ全体へと変化していったことにあるのではないかということ仮説とし、各種の文献や資料から得られる歴史的事実等をレビューして先行研究の見解に関する疑問点を検証するとともに、仮説の合理性を説明した。本稿は、ベルベル人に着眼して考察する必要性について問題提起し、一石を投じるものである。

第1章 モロッコにおけるベルベル人

モロッコではベルベル人の人口比率は4～6割であり（保護領期以前は過半）、先住民ではあるが少数民族とは言えない。16世紀以降はアラブ人王朝となったが、民族弾圧を受けたことはなかった。

文字を持たず、方言により遠隔地部族とは意思疎通が困難であった。部族ごとに独立した社会で、ベルベル人としての同胞意識は希薄であり、地域・部族への帰属意識が強かった。

アラブ侵入以降、イスラーム化されたが、土着信仰と親和性があった聖者崇拜や神秘主義が根づいた。ムスリムであることを自認しつつも、部族の慣習法を維持した。

第2章 保護国化以前のアラウィー朝統治

シバの地ではスルタンの政治的権威を認めず、納税を拒否し、スルタンとの間にバイアの関係はなかった。従って、祖先がシバの地の住民であった人びとは、バイアの歴史を共有しているわけではない。スルタンは強制徴税や反乱鎮圧のための軍事遠征をしたが、対象はアラブ人も含まれており、ベルベル人に対する民族弾圧ではない。シャリーフはいたるところに存在し、彼らにとって王家がシャリーフであることは特別の意味を持たなかった。

スルタンの軍事遠征や異教徒侵入に対しては、自らの地域・部族に影響するかが問題であり、影響を受けない部族が連携することはなかった。

20世紀初頭には、王族等による反乱が頻発し、それらの支援者は主として地域のベルベル人であったが、彼らの目的はモロッコ全体を視野とした政治的なものではなく、略奪等、部族や一族の利益であった。反乱首謀者が王族の場合、政権・反乱側ともにシャリーフであり、シャリーフであることの特別性はなかった。また、スルタンとバイアの関係にあったマフゼンの地（スルタン政府の支配地域）の部族がスルタン支援のために遠隔地から参集することはなく、最も忠誠心が期待された近衛兵が反乱に加わることもあり、バイアが政権安定に寄与したとはいえない。

第3章 保護領下の体制

シバの地の平定とベルベル勅令

保護国化後、仏・西はシバの地の平定に15-20年費やすことになる。シバの地のベルベル人の抵抗は、自らの地域への侵入や干渉に対するものであり、植民地化への反発ではなかった。仏は、彼らに慣習法の維持やスルタンの支配下としないことを保証することで平定が進むことを発見し、その政策がベルベル勅令となっていった。同勅令については、仏が統治を容易にするため、アラブ人とベルベル人をスルタンの権威の基盤であるシャリーアの法（正統派イスラーム）と部族の慣習法に分断したとの側面が強調されることが多いが、ベルベル人側には肯定的に受けとめていた人びとがいたことも考え合わせるべきである。また、同勅令に対して、アラブ、ベルベルが一致して反発したとの見方があるが、ベルベル人による日

立った反発や抵抗は見られなかった。

ベルベル人有力者たちの体制内化

平定に応じたベルベル人は保護領側の戦力となっていった。保護領当局は平定に応じた部族長をパシャやカーイドとし、地域における権威、経済権益を供与した。彼らは保護領体制の受益者となり、部族民も徴募兵や情報提供者として現金報酬を得て保護領体制に組み込まれていった。カーイドやパシャは形式的にはスルタンが任命したが、それによってスルタンとの間にバイアの関係ができたとは考えられない。後に、彼らは反植民地運動を擁護するムハンマドに対して反スルタン運動を展開するのである。

第4章 民族主義運動、反植民地運動と独立への過程

アブドゥルカリームのリーフ戦争

スペイン領のベルベル人による反植民地闘争と位置付けられることが多いが、実際には、多くのベルベル部族がリーフ勢力に反発してスペイン側につき、ベルベル人としての一体感はなかった。また、アブドゥルカリームが標榜する正統派イスラームに対して神秘主義教団が反発して対立したのであり、イスラームの下に一致した運動とはいえない。この戦争にアラブ人は参加せず、アラブ・ベルベルが一致して西・仏に対抗したものでもなかった。

ベルベル勅令と民族主義運動

ベルベル勅令に反発して民族主義運動が勃興し、それが反植民地運動となっていったとする見方があるが、そのような動きはベルベル人には見られなかった。この民族主義運動や反植民地運動は主に都市部のアラブ人エリートによるものであり、ベルベル人は含まれていない。

反植民地主義とあらたな対立の構図

以前より、イスラームでもサラフィー主義（聖典主義）と神秘主義は対立関係にあったが、其々が反植民地運動、保護領体制と結びついた。イスラームの旗の下で一致して独立運動を展開したとする見方があるが、ムスリム・アイデンティは見えてこない。グラウイ等ベルベル人豪族は保護領体制の受益者であり、反植民地運動を展開するナショナリストとそれを擁

護するスルタン・ムハンマドとは対立関係となっていた。そして、反スルタン運動を開始していた神秘主義教団（指導者キッターニ）にグラウイ等豪族が同調し、連携して反スルタン運動を展開したのである。

反スルタン運動とムハンマド廃位

仏がベルベル人豪族を利用してムハンマドを廃位し、傀儡スルタンのアラファを後任として据えたとする見方があるが、実態は以下のとおりであった。

神秘主義教団やグラウイ等は、スルタンがナショナリストを擁護することは、反イスラーム的であると非難し、スルタン退位を要求して仏保護領当局に圧力をかけた。保護領当局が他目的でグラウイ等を利用していた側面はあるが、仏本国はスルタン保護の立場であり、現地当局に対して、グラウイ等の要求には応じないように訓令を出していた。しかし、グラウイ等がグラウイ家と縁戚関係にあった王族のアラファをイマームとして擁立し、ベルベル人豪族軍がラバトに進軍する事態におよび、内戦を懸念した仏によってムハンマド廃位に至ったのである。また、後にアラファは、自発的退位等、仏からの要請を拒絶したのであり、必ずしも仏による傀儡スルタンとはいえない。

各政治勢力の立ち位置の変化

廃位後、仏は徐々に軸足をアラファからムハンマドに移し、これによりベルベル人豪族もアラファ退位を容認する。ムハンマドはナショナリストの一部に王制否定の考えがあることを懸念していた。独立前年には、ムハンマドはイスティクラール党とは徐々に距離を置いて仏との協力に軸足を移し、穏健派ベルベル人のベッカイを独立交渉の実務者としたのである。

グラウイはムハンマドの復位を認めていなかったが、エジプトの中立化政策の影響を受けた急進的社会変革を懸念して、ムハンマド復位を容認する。これにより、独立に向けて事態は一気に進展していった。

ベルベル人であることと政治行動

ベルベル人の立ち位置は一様ではなかった。豪族たちは、反植民地運動とそれをムハンマドが擁護したしたことに対して危機意識を持ち、広域部族が連携して反スルタン運動を展開した。それは、モロッコ全体を視野とした政治行動であった。

ベッカイは親ムハンマドだが、反仏ではない穏健派リーダーであった。ベルベル人の中には反植民地運動に参加したものもいたが、ごく一部であり、殆どの一般のベルベル人は政治的活動に参加することなく、農村・山岳部で部族民として従来 of 生活を送っていたのである。

民族主義運動、反植民地運動におけるバイア、シャリーフの効用について

反スルタン運動を展開していたキッターニ、ナショナリストの攻撃対象となったアラファはシャリーフであり、シャリーフであることは特段の意味を持たなかった。また、現職スルタンを否定した反アラファ運動が展開されたのであり、民衆とスルタンの間にはバイアの関係は存在しなかった。

結論

保護国化から独立にいたる過程において、シャリーフやバイアといった宗教的正統性や権威が、特段の役割を果たしたわけではなく、その後の国民統合の土壌となったとはいえない。

グラウイ等ベルベル人豪族は反スルタン運動を展開したが、それは、彼らの帰属意識がそれまでの地域・部族からモロッコ全体に変化していったことによる政治行動であった。

アラブとベルベルは、政治的対立や分断はあったが、民族として対立・衝突することはなかった。

ムハンマド廃位後、ムハンマド派もアラファ派もスルタンを君主とする統治体制を前提としていたし、その中には、かつてシバの地にあってスルタンの支配下になかったベルベル人たちも含まれていた。

これらのことは独立後の国民統合の土壌となっていると言えるだろう。